鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 22 年 6 月 18 日）

公冶長第五

19　季文子、三たび思いて後に行う。子之を聞きて曰く、再びせば斯れ可なり。

孔子が季文子について批評をしています。三たびとは、何回もという意味です。

季文子は何回も考えて、それから行動した。孔子がこれを聞いて、「一度考えて、どうかなと思ったら、もう一度考えればそれで十分だ」と言いました。

魯の宰相（総理大臣）の季文子は非常に慎重な人で、以前、魯の国の使いとして晋国に派遣される時に、晋国の君主である襄公が重い病氣だということを知っていたので、喪服を準備して出かけて行った。周りの従者から、そこまで用意しなくてもと言われつつ行ったのですが、はたして襄公は死んでいて用意した喪の礼が間に合った。そういう状況を孔子は知っているわけです。

特にこれはしなければならないというものは何度も考える必要はなく、問題が起きたらすかさずその場で判断し、決定して行動しなければならない。渋沢栄一も『論語講義』の中で、そう書いています。

現代で考えると、口蹄疫もその例だと思います。病氣が発生した時に、よく調べないと分からないということで、何度も何度も調べているうちにどんどん蔓延してしまった。何度も考えているうちに対策が手遅れになるような状況にあっては、責任者は一回ですぱっと決断しなければならないと感じます。

今回農水大臣を辞めた赤松さんは、最初は突っ張っていましたが、外国でゴルフをしていたことを叩かれたり、決断の遅いことを叩かれて、このまま大臣を続けても引きずり降ろされると感じて辞表を出したのだろうと思いました。

政治家で大臣ともなれば、即断即決しなければならない場面は多々あると思いますので、何度も思い悩むことはよくないとこの文章を読めば良いでしょう。

20　子曰く、甯武子、邦道有れば則ち知なり。邦道無ければ則ち愚なり。其の知には及ぶべきなり。其の愚には及ぶべからざるなり。

甯武子は衛の大夫です。

孔子が言うには、甯武子は国が治まっている時は知者になるけれども、国家が乱れると愚か者を装う。国家が治まっている時に良い知恵を出すのは誰でも出来る。私も出来る。しかし国家が乱れてきた時には、知恵者は目立つから愚か者になって目立たないように隠れてしまう。そういう技は私には真似できない。

国が乱れていれば乱れているなりに、こうすれば良くなるということを一所懸命言って、討たれるのは敵わないとスーっと隠れるような真似は私にはできないと言っています。

菅さんが総理大臣になりましたので、菅さんはどうでしょうか。日本の国が真っ当であれば知恵者としての知恵がどんどん出せますが、鳩山さんが普天間問題で物議を醸している時に、愚か者のふりをして、総理大臣の椅子が転げ込んでくるように何も意見を言わない。知恵者の顔を出さない。副総理でいながらずっと愚か者の真似をしていたら、総理大臣の椅子が転げ込んできた。愚か者の真似をするというのはなかなか難しいけれども、管さんはそれをやり遂げたのだろうと思います。

もう一つ付け加えると、菅さんは、財務官僚に大分知恵を付けられたと思いますが、風向きが良くなってきたから消費税を上げるというアドバルーンを揚げました。尚且つ、自民党がの示した 10%を参考にすると言っていますから、民主党も 10%と言っているようなものです。風向きにあわせて上手に変わるなと思いつつ、その術はたいしたものだと思います。国が乱れている時、例えば北朝鮮がミサイルでも発射して日本にミサイルが落ちたとすると、今度は愚か者の真似をするかもしれないと感じます。

21　子陳に在りて曰く、帰らんか、帰らんか。吾党の小子狂簡なり。斐然として章を成せども、之を裁する所以を知らずと。

孔子が陳の国に滞在している時に言いました。

自分の考えていることが各国に受け入れられないので、もう帰るぞ、もう帰るぞ。自分を慕ってくれた故郷の若者達は、志は大きいけれども行動は片寄っている。綾模様の綺麗な衣を裁って、きちんとした素晴らしい衣服を作る方法を彼等は知らない。

狂簡とは、パワーはあるけれどもどっちを向いているか分からない。暴走族の塊のようなイメージを孔子は郷里の若者に対して持っているわけです。なので、自分が郷里に帰って、暴走族のような真似をしかねない若者達の力を大いに活用して、世の中の役に立つにはこうすべきだという教育をしたいものだと言っています。

今、大学教授が増えています。大学教授は資格が要らないのだそうです。大学に請われれば、誰でもなれる。その結果、大学が助成金欲しさに、天下りということではなく高級官僚を招聘する。或いは、どこかの知事も知事を辞めて次の選挙に立候補するまでの間、大学の教授になる。そういうケースが結構多いようです。テレビを見ていると、大学教授という肩書きの人が増えました。自分の理想としたものが所属している役所では出来ないとか、或いは自分の自治体でやるべきことはやり尽くしたので、後は教育だということで大学教授になる。世間に名前の通った人で、助成金を持ってこられるような人であれば大学側は大歓迎ですから、粗製濫造の大学教授が増えていると感じます。

本日の解説は以上です。